

水産試験研究費「漁業資源対策研究」

アカムツ及びシリヤケイカの漁獲状況と資源動向について

住友寿明・吉岡拓也

近年、徳島県ではアカムツやシリヤケイカが重要な漁獲対象となっている。その一方でアカムツやシリヤケイカに関する漁獲状況や資源量、資源動向については十分に把握されていない。今後、アカムツ及びシリヤケイカの資源を有効かつ持続的に利用するためには、これらの知見が必要である。そこで、標本漁協から得られた漁獲情報をもとに、最近の漁獲状況や資源水準、資源動向を調べた。

方法

漁獲集計システムを導入している漁協を漁獲情報調査の標本漁協とした。アカムツについては、平成20～28年の海部沿岸で操業する延縄による漁獲量およびCPUE (kg/日・隻) をもとめ、漁獲量、資源水準、資源動向を推測した。シリヤケイカについては、春季に発生した個体が秋季以降に漁獲対象となり約1年で死滅することから、9～翌8月を1年度として平成19～27年度の紀伊水道で操業する小型底びき網による漁獲量およびCPUE (kg/日・隻) をもとめ、漁獲量、資源水準、資源動向を推測した。

結果

平成20～28年におけるアカムツの漁獲量とCPUEを図1に示した。漁獲量は変動が大きく、年間2.1～7.8トンで推移した。主漁期は4～9月だが、平成24年以降は他の月にもまとまった漁獲がみられるようになった。CPUEは2年連続で増加したが、平成25年以前より低い水準にある。

平成19～27年度におけるシリヤケイカの漁獲量とCPUEを図2に示した。漁獲量は変動が大きく、年間6.8～176.3トンで推移した。主漁期は1月だが、2月にまとまった漁獲がみられる年もあった。CPUEは漁獲量に類似した変動を示した。

考察

アカムツの資源動向は横ばい傾向であるが、漁獲圧は以前より高いと考えられる。シリヤケイカは漁獲量の変動が大きいものの、資源動向は横ばい傾向と考えられる。両魚種とも資源量の顕著な減少はみられないが、経済的価値の上昇に伴い漁獲圧が過剰となり資源量が減少傾向に転じる恐れもある。資源を持続的かつ有効に利用するためにも資源量や資源動向に関する情報を収集し、必要に応じて適切な対策を講じる必要がある。

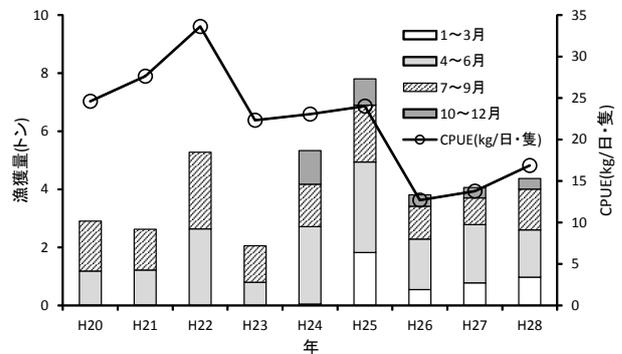


図1. 海部沿岸の標本漁協におけるアカムツの漁獲量とCPUE。

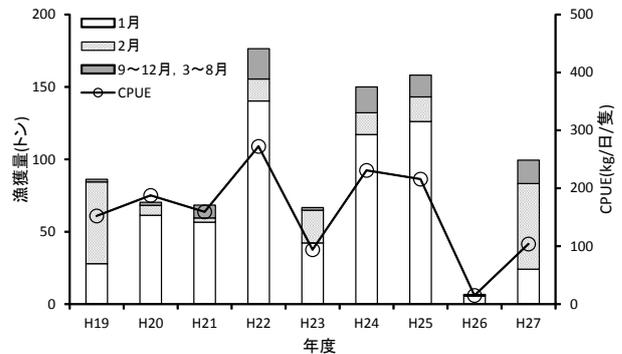


図2. 紀伊水道の標本漁協におけるシリヤケイカの漁獲量とCPUE。

